革新的なテクノロジーを提供し続けるボストン・サイエンティフィック ジャパン

「日本と世界」、「人と人」、「今と未来」3つの“つなぐ”で日本の医療に貢献

日本で30周年、デバイスカンパニーからヘルスケアカンパニーへ

革新的な低侵襲テクノロジーを提供し続けてきた
ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社が、
2017年11月に創立30周年を迎えた。
同社は、これからのありたい姿を
“つなぐ”のコンセプトで明文化している。
これまでの同社の歩みと今、そしてこれからの試みについて、
代表取締役社長の内木祐介氏と
バイスプレジデント/カーディオバスキュラー統括の
スティーブン モース氏にお話を伺った。

ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社
代表取締役社長
内木 祐介氏

ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社
バイスプレジデント/
カーディオバスキュラー部門ジェネラルマネージャー
スティーブン モース氏

イノベーティブな医療機器と新しい手技を日本に導入して30年

――この30年間に、貴社が果たしてきた日本の医療における役割をお聞かせください。

内木　この30年間で、日本の医療は目覚ましく進歩し、日本人の平均寿命も大きく延びました。これは日本の医療制度や高い医療の質がもたらした成果だったと思います。弊社は、心筋梗塞や狭心症等の冠動脈疾患に対する診断、治療領域を扱うインターベンショナル カーディオロジー、不整脈治療や心臓突然死を未然に防ぐICD治療などの領域のリズムマネジメント、末梢血管治療領域のペリフェラル インターベンション、消化器系のがんや狭窄、ぜんそく等の呼吸器疾患などの内視鏡治療を領域とするエンドスコピー、尿路結石や尿失禁、骨盤臓器脱などの治療領域のウロロジー&ペルビックヘルス、慢性疼痛やパーキンソン病治療領域のニューロモジュレーションの合わせて6つの領域に事業を展開しています。この30年間、患者さんにとって負担の少ない、かつ治療効果の高いイノベーティブな医療機器を、日本の臨床に携わる医療従事者の方々と共に患者さんのもとへ届けてまいりました。

――モースさんはカーディオバスキュラー分野を統括する立場に就かれていますが、現在の活動について教えてください。

モース　私は米国ボストン・サイエンティフィックで20年ほど勤務してきました。ここ数年は、グローバルマーケティングのヘッドとして全世界の製品ポートフォリオの決定に深く関わり、数多くの米国や欧州で生まれたアイデアやテクノロジーを日本に導入してきました。日本に来てからまだ9カ月しか経っていませんが、今や逆に日本で生まれたアイデアやテクノロジーが世界に向けてかなり発信されていることを強く実感しています。患者さんをどのように治療すべきか、どのようなケアをグローバルスタンダードにするかなど、日本がリードしている事例があります。

――その具体的な事例をご紹介ください。

モース　S-ICD(Subcutaneous Implantable Cardiac Defibrillator:皮下植込み型除細動器)における取り組みは、日本が世界をリードしている事例の1つだと思います。S-ICDは心臓突然死の高リスク患者さんを対象に皮下に植込む除細動器で、経静脈的な心臓内へのリード留置が不要なため、感染症をはじめとした合併症の軽減にも寄与しています。このS-ICDは日本では昨年に認可された新しい機器です。

我々はこの新しい機器を日本に導入するにあたり、海外から専門知識も経験値も豊富な医師に来ていただき、日本の医師に現行の術式との違いを学んでいただきました。一方で、一歩一歩、丁寧に症例を積み重ねる日本的なスタイルから導かれた鮮やかな手技やアイデアは、経験豊富な海外医師たちを感嘆させ、結果的により早い速度でS-ICDの普及を可能にしました。2016年末までに世界では3万例以上の植込み実績があります。これはまさに他国での学びを日本につなぎ、日本での学びを世界へと発信している例だと思います。

「日本と世界」、「人と人」、「今と未来」の3つの“つなぐ”

――貴社がこれからのありたい姿として提唱するコンセプト、「日本を医療でつなぐ」について教えてください。

内木　創立30周年を迎えるにあたって、有志の社員40人ほどが集まり、会社のそして自分たちの今後のありたい姿を探るプロジェクトを発足させました。社員による数多のディスカッションの結果、導き出したコンセプトが「日本 医療 つなぐ」、つまり「日本を医療でつなぐ」です。

“日本”に関しては、我々のホームグラウンドであることに加え、従来から行っている海外のテクノロジーを日本に輸入するのみならず、今まで以上に日本の素晴らしさを日本の医療従事者の方々と共に世界に発信していきたいという想いが込められています。先程話題になったS-ICDも、「日本と世界」を“つなぐ”一例だと思います。

次に“医療”ですが、我々は医療機器を開発、製造、販売する会社として、特に患者さんの負担の少ない、治療効果の高い製品を提供し、医療従事者の方々の信頼を得て、医療に貢献してきました。しかし医療環境やニーズの変化に伴い、患者さんの負担軽減、治療効果だけでなく、トータル医療費の削減、患者さんやそのご家族がより生き生きと人生を歩めるよう、疾患の予防や早期診断の領域へもビジネスが拡大しつつあります。そのほかには、医療従事者の方々を支える包括的な教育プログラムや、医療機関の経営課題に応えるサポートプログラムを拡充するなど、新たな取り組みも開

ボストン・サイエンティフィック ジャパンのありたい姿

日本を医療で“つなぐ”

ボストン・サイエンティフィック ジャパンがこれからのありたい姿として提唱する「日本を医療でつなぐ」。「日本と世界」、「人と人」、「今と未来」という3つの“つなぐ”で日本の医療に貢献していくという想いが込められている。

EMBLEM™ MRI S-ICDシステム

心臓突然死の高リスク患者を対象に開発された皮下植込み型ICDシステム。経静脈ICDで行う心臓内へのリード留置が不要なため、感染症をはじめとした合併症の軽減にも寄与。MRI撮像にも対応している。

始しています。今や治療デバイスカンパニーを超え、医療全体に関わるヘルスケアカンパニーとして「人と人」をつなぎ、日本の医療に貢献する、そうした想いを込めたのが“医療”という言葉です。

最後の“つなぐ”ですが、我々はイノベーティブな製品を通して「日本と世界」を“つなぐ”という仕事をしていますが、医療従事者の方々と患者さんを“つなぐ”ことで医療と患者さんにも貢献していると自負しています。疾患やその治療法の啓蒙活動や、全国の小学生を対象とした医科学教育をはじめとした様々なプログラムによって、医療をより身近で大切なものにしていきたいと考えています。日本の医療を「未来」へ“つなぐ”という社員の想いが取り組みとして大きく広がりを持ちつつあります。

「日本と世界」、「人と人」、「今と未来」3つをつなぐことで、「日本を医療でつなぐ」。我々は、この想いを持って、この先も日本の医療に貢献していきたいと考えています。

革新的な治療法を提供することで患者さんの人生を実り多いものに

――今後の試みについて、テクノロジー&イノベーションの面からお聞かせください。

モース　現在、日本においても世界においても医療コストの高まりが課題の1つとして挙げられています。

我々が開発し、製品に搭載した革新的なテクノロジーの1つにENDURALIFE™バッテリーがあります。これは従来のバッテリー寿命にさらに改善を加えたもので、この春には、ENDURALIFE™バッテリーを搭載したCRT-D（Cardiac Resynchronization Therapy-Defibrillator：両室ペーシング機能付き植込み型除細動器）の寿命が、交換手術の回数を減らし、患者の予後改善とNHSに対して5年間で約600万ポンド（約9億円）のコスト節減をもたらすと英国政府機関のNICEより発表されました(注)。現在日本国内で提供しているRESONATE™ X4 CRT-DにはこのENDURALIFE™バッテリーが搭載されています。このように長寿命バッテリーが交換手術の回数を減らし、医療コスト節減や患者さんの治療効果を持続させることができることは、日本でも大きな意味を持つと思います。ENDURALIFE™バッテリーは順次、他のデバイスにも搭載をしていく予定です。

また新たに、心房細動に起因して形成される血栓の流出を阻止し、脳卒中のリスク低減を目指したデバイスや、心不全の兆候をセンサーで収集し分析することで患者さんの症状の悪化を感知して医療従事者に伝えるデバイスなど、イノベーティブな診断と治療デバイスの日本での展開を考えています。

（注）NICEとは、英国の国民保健サービス（National Health Service：NHS）において、費用対効果に基づく標準的な医療を提供し、ガイダンスとして提言する英国政府機関です。

――まさに「今と未来」をつなぐデバイスですね。

内木　「Meaningful Innovation」（意義のあるイノベーション）という言葉は弊社のコアバリューの1つでもあり、これからも力を注いでいきたいと考えています。また弊社と日本企業との共同製品開発をさらに進めたり、日本と米国、アジアを含めて世界中のボストン・サイエンティフィック社員との人事交流に力を入れるなど、これからもいろいろな意味でより積極的なグローバル化を図っていきます。

モース　私がここにいること自体が、その証左になろうかと思います。世界中のボストン・サイエンティフィックメンバーと日本の医療従事者の方々とをつないでいくこと、またグローバルで活躍できる日本人メンバーを世界中に送り出すことを進めたいと思います。既に米国やアジアで活躍している日本人メンバーもおります。

――最後に、仕事に対する信条をお聞かせください。

内木　弊社の理念は、革新的な治療法を提供することで、全世界の患者さんやそのご家族の人生を実り多いものにすることです。私の信条もこれに即したもので、「Patient First」という言葉を大事にしています。また、社員全員が長く生き生きと働きやすいと魅力を感じる会社でありたいと思い、そうした環境づくりにも真剣に取り組んでいます。

モース　ボストン・サイエンティフィック ジャパンが明確な価値観を持っていることが、非常に好ましいと私は思っています。我々はテクノロジーを核とする会社なので、興味がどうしてもイノベーションに傾きがちです。しかし弊社の全員を結び付けている信条である、患者さんを想う気持ち「Caring」（誠実さと思いやり）を持って仕事に向かうことが、患者さんの健康状態を改善するための最善のことと思います。

内木　我々の仕事の醍醐味は、革新的な治療法を提供することで、患者さんの実りある人生に貢献することです。その信条を曲げることなく、これからも活動していきたいと思います。

Boston Scientific
Advancing science for life™

ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社
本社 東京都中野区中野4-10-2 中野セントラルパークサウス
www.bostonscientific.jp

PSST20171121-1213

Boston Scientific
Advancing science for life™

日経メディカル2017年12月号 抜刷

革新的なテクノロジーを提供し続けるボストン・サイエンティフィック ジャパン

「日本と世界」、「人と人」、「今と未来」3つの“つなぐ”で日本の医療に貢献

日本で30周年、デバイスカンパニーからヘルスケアカンパニーへ

日経BP社の許可により「日経メディカル」2017年12月号の広告から抜粋したものです。
禁無断転載　©日経BP社